

持 41

972

新訂 倭文 釋迦 八相



第三編
下巻

萬亭應賀原著
花笠又素重行

釋迦八相

也来と

文庫



斯文堂
梓

真書 釋迦八相倭文庫三編下之卷

東都

萬亭 應賀原著

花笠 文京重訂

第六回

吹雪を伺て孝女父を尋ぬ

去る程又悉達太子ののりものおんか橋子を伽比羅城へと急するの道路お白髪一人は修行者露れ身未れ命も細き音に鐘うち鳴し來掛るをお先を拂ふ徒歩士眼に角立て仇たかく「ヤア醜しき非人坊箇の辱しけなくも帝の若宮薛頭蘭弗より還御のお先片寄らぬのと罵りりあが片臂強く突退られ年波寄一翁が足元はや踰限て轉倒ふをソレ打拂へとお跡より奴僕一人走り來て長柄の元にて勿飛を太子ののりもの轎子より御覽じて聲掛たまひ轎子仰させて立出たまへば優陀夷を始め供奉の面々是の如何にと止むるを耳にも掛ず走り寄り奴僕を彼方へ叱り退け伏轉びつゝ惱ぬる翁の手を取り扶け起し塵打拂ひ勞りて「喃翁許くたへ奴僕の畜類に異あらぬべ老たるを敬まふと文母の如しとの教をまらむ如何に優陀夷承まひれ君十全の位を保つも國土豊饒に萬民の榮を守る爲めぞうし然を無情今の舉動歴の如何にも心苦し其方も翁を勞はらずやと實難有き御詞に優陀夷の服して甲斐

無情今の舉動歴の如何にも心苦し其方も翁を勞はらずやと實難有き御詞に優陀夷の服して甲斐

萬亭應賀原著
花笠又京重訂

釋迦八相

也来と

文庫



斯文堂
梓

異書 釋迦八相 文庫三編下之卷

第六回

吹雪を冒して孝女父を尋ぬ

東都

萬亭 應賀原著

花笠 又京重訂

去る程、悉達天子の御輦を伽比羅城へと急するの道路、白髪一人は修行者露れ身未だ命細き音に鐘うち鳴し來掛るをお先を拂ふ徒歩士眼に角立て、傍たなく「ヤア、醜しき非人坊箇の辱しけなくも帝の若宮、醜頭蘭弗より還御のお先片寄らぬのと罵りあが、片臂強く突退られ年波寄一翁が足元はや踰跟て轉倒ふをソレ打拂へとお跡より奴僕一人走り來て長柄の元にて、勿飛とを太子の輦子より御覽じて聲掛たまひ輦子御させて立出たまへば、優陀夷を始め供奉の面々、是の如何にと止むるを耳にも掛ず走り寄り、奴僕を彼方へ叱り退け、伏轉びつゝ惱ぬる翁の手を取り扶け起し、塵打拂ひ勞りて「喃、翁許一くたべ、奴僕に畜類に異ならぬや老たるを敬まふと文母の如しどの教をまらぞ如何に優陀夷承まのれ君十全の位を保つも國土豊饒に萬民の榮を守る爲めぞうし然を無情今の舉動、磨の如何にも心苦し其方も翁を勞いらすやと實難有き御詞に優陀夷の服して甲斐

くしく傍み立寄り勞れば老翁の惱める色を直し襟かみ繕るひ形容を改ため太子のおん顔つく
 く見て「箇の不思議面妖る其許の正しく此曉さ仇し野みて我が助けたる幼免よかど不審る詞不
 優陀夷の駭死翁に向ひて云るやう「諸の難に逢た修行者どの盡ぬ縁故に廻りあひ深き思とバ仇を
 報ひし知らぬ事とく下人が慮外偏よく許されよ何の左もあれ爰の途中まづ伽比羅城へ作あふへ
 し誘たまへと鞠むれば老翁の首を打振く「イヤ夫に及ばぬ事餘り小優しき此稚兒の志ざし小愛
 で今爰で我が身の上を明すべし夫れ南海國の都府をバ仙奈長城と云ふ此首府の主個仙摩利王の一
 子仙淨太子と云ふ我もて當初十五歳の時當淨國の丑寅ある亞加多仙と云る山よて寶惠菩薩摩訶
 若經を説きたまふ其聽聞と望むよ依り或る時宮中を潜び出で法坐よ連ある程もかく寶惠菩薩の惜
 いかち早く涅槃入りたりたまひ半偈を聽て半偈を聞かず此ま宮中お返りあば十全萬乘の君と侍づ
 うれ漸やくよて聞得ざる般若の功德も空しくせば後生如何と思ひゆる菩薩へ報恩二つよ此
 身の修行と住別一都府を跡振捨てあらゆる國々を遍歴せしを今將た思ひ屈指れば七十年よ餘り
 たり然るよ今日不思議も情ある若宮よ邂逅一ころ嬉しなれアヲ豊ある顔の難はひや嗚呼夫とて
 も頼まれぬ老少不定の習よて萬事の夢の浮世ある若宮去らばと起上る太子の翁の物語聞くとく

よ身は類され今の入目も憚からず翁の袖を取結び「アヲ尊どの翁やあふ磨も兼々いと深く志ざ
 ぬるとあれバ何處までも連行きて般若の道を一字たりとも教之學べたび給へ左なくバ爰を放た
 トと漫泣して縫り付き何事なく見ゆるを優陀夷の押止め「コハ淺猿の御心やいよく以て發心の
 おん望をバ却々と思ひ止ませたまはぬよな去バとて父君の豈打捨てたまふべきやイヤ御轎子よ召
 たまへと心よ泪眼よ角立て翁を隔て御ぞくれバ翁も去るもの優陀夷の心を夫と察して去氣なく呵
 々と打笑ひ袖振切て行うんとするを太子の尙も引止め「ノウ情や見捨てたまふか是非は伴ひたま
 へるしと和理なく見ゆるを荒氣なく故意と振切り押遣て翁の急を別れゆく太子の何とせん方も泣
 く「心を茫然と立せ給ふを優陀夷始め次々の者一同よ口を揃へて諫めまつり漸くかん轎子へ移
 まるらせ伽比羅城へと還御ありの如何も辛きかん有様あり侍て太子の宮中へ還御まじくして
 玉の床よ着たまふといへを翁が言葉を開きより尙更發心の志ざし強く如何もして彼の道よ入ん
 と思ふ心の絶えず去れば之を世お傳へて如來の九歳出家十一解脫と申しぬ諸亦優陀夷の轎邊彌
 の前お伺候し太子が轎頭蘭院よてのおん勳舉殊お提婆が謀叛おて外道の怪異ありたると及び還御
 の途中おて彼の修行者の翁が有様物細密よ申し上れば轎邊彌の方の深く驚ろささまひ且悲しみく

曰まふやう「否とよ優陀夷太子のいよく發心の望と絶ぬ極つたり去ばとて此儘又開流して捨
置バ其許の勿論卑妾の越度如何あるかん咎と蒙むらんも知れ老父君今夜渡御たまへバ夫等の有様
詳細よかん物語を申上ん先夫迄の次々の者へも包み隠しおくべとて優陀夷よのか暇賜り夜
の寐伽のかん修飾も何となく物蕭寂ある折しも彼方の賑しく人目の關の超るとも争で許さん戀の
關目よ正月の味もあしと女中が謠へバ男も謠ふ與と表の境あるお口の鈴の音高々と帝の入御と報
知すれば皆々裾衣ういどりつゝ女中達のかん出迎ひそとさま夜の御極へと移しまつりて夫々御
機嫌伺ひ相辨バ優陀夷の女房指揮して皆お暇と玉ふよ多の女中の例よりも早にお退と笑顔と
作と頭と掉て詰所へ部屋へと罷りゆく恠て橋邊彌の方の帝の御機嫌の折と伺ひかん膝近へ
進み寄り「只今申上るの他なはず太子のか身の上簡様」と裁お優陀夷が申せし如く事明細よ
告奉まつれば帝の痛く御心と惱まし暫し涙よ暮れまひしが稍あつて曰ふやう「今更嘆くも甲斐あ
りれど此度の仔細の左も右も磨の知らぬ爲よして其許と優陀夷と談合し屹度諫め諭とべし惜其後
の磨のまと思ふ仔細のあるらふ計らふ術もあるべけれバと物柔りある仰と受け橋邊彌の嘆の中
おも嬉しき君の御詞と些少の心安堵つ其夜の紅闇お夢と結び翌朝橋邊彌の帝の仰を其儘お優陀夷

を召て物語れば優陀夷の心得太子をバ橋邊彌の居間へ誘なひまわらせ四邊の人を遠離し太子の
迅くも夫と察れど何氣なく在せしを橋邊彌の莞爾よ「チ、何とても麗しき太子のれん容体父君を
始め親妾が喜悅この上や侍るべき夫よ就きチ尋ねなきの此程人の取沙汰よ太子の發心捨捨の道
三摩耶經のたん望深く在ますといふとあるが眞よ去るれ心なるか但し風評の間違か何よせよ心
苦しと云バ太子の微笑つゝ尙やうの色を隠さんと「是のく母上の思ひも寄ぬかん尋問然らぬ事
實と告侍らん磨頭蘭の院へ移りてより一人衆の肌寒く身をも世をも顧みず淫肆の花街へ通ひな
れ訝な事の數々よ人の誹謗も隨意よして遂は磨頭蘭の布絶奉加賽錢までも運び盡し夫のまならず
圓布陀金の佛身よ刃を掛しと優陀夷の妻もゑる處る嗚呼勿体なや恐ろしや此他よ發心とやら如
何なるとの夢更覺えの候らすと最耻し氣よ曰へバ橋邊彌の頭を振り「イヤ其事も聞侍り耐わら
バ又此程磨頭蘭より遠御の途中見る影もなき修行者の廓飾言を申せしよかん身深く信じたまひ
直よ其儘發心の師とも頼まん計のかん舉動是の如何なるかん事ぞモシ左様の事もあるならば親妾
の奈何よせん若宮在ませばこそ帝のかん恵も深く殊よ聖代繁榮と萬民の喜悅是よ過ぎず其目出
ふさよ引換ていよく發心のお望あらば是非もなや親妾も俱よ其よ假令如何なる山の奥野の末ま

でも太子は随従ひ其先
途と見窮ゆんと思へば
思ひ思ひる、後の此身
の辛さより今の心の悲
しさを果敢なき花の露
程も察したまへと掻口
説き袂を顔に押當てま
ゝとばかり泣入たま
へば側聞する優陀夷も
俱に貫泣して扣ゆれば太子も有難遺瀬なく方々
の心を慰撫んと「是の由なきおむづかり夫れ發
心放謝との道と智慧と慈悲心とよて此中一つ欠
ても適ひ難く抑々道との心の沙汰かり智慧との



思慮分別慈悲との人は從順て心を破らぬを申す
あり磨磨頭蘭の院より歸途道の傍に來掛り一年
彼寄一修行者を下官共が善悪なく折惱まをを見
るゝ忍びと老たるを敬ふ父母の如くと聞かふよ
橋子より立出て老翁の心
を宥め一は老翁の如何も
も怨一氣お我も或る國の
太子よて夥多の臣下侍
うれしが剣とやう剣とや
ういふとを覺はしむる遠
お國を逐出されかゝる拙
なき身と落魄れ是等の國
まで彷徨來れりと言つゝ



剣とやう剣とやう云ふおん身
の好き給ふ事を聞まやうと屏
ねるゝ老翁の深く好める道

道を除く行過
んとせ
しゆゑ
自の心
老翁の
袖を引
とめ其

ゆゑ人よの包むか得も答へて只打笑ふて行過ぬ是等の事の優陀夷あつて知るものか其刻とや
 剣とやらいふ位も國も失なふ程の悪き物されば此悉達に更々以て望な一アヲ恐一の剣剣や崑崙
 の山の崩るとも磨の心の空しくせし若や悪き事あつて優陀夷の屹度磨を諫めよ必ず父君や母上
 と密に申すと成りぬれと御心の底を押し包み只片言小曰まふを夫といふと橋鼻彌又も涙を押し包み
 啼許してたゞ若宮左程優一き御心を怨み申せし耻しきよ智慧あきものよ智慧付て却て不覺を取し
 よ赤般若を剣と思ひたまひ半偈を剣と思しめそのとあどけるき幼稚心は何事の在るべき優陀夷も
 心安く思ひぬれよ如何に誰のあると呼れて出来る女中達やめて太子は侍きて優陀夷も共御居間を
 出で歸られたる既其日も暮近く折く雪の降出て俄に積る白妙のおん園の彼方にて十一二の
 女子の聲「ナトお願ひ申し」と云ふ聲さへも降まざる吹雪の風お探れつゝ細く幽く聞ゆるを
 側へ居合す命婦が聞付け氣味悪氣を耳を澄して尙よく様子伺ひ正しく乙女の聲音さればやをら
 庭より下立て手笠小雪を凌ぎつゝ折戸を細目も明て見ればまだ十歳計の幼なき娘いと哀れ氣なる姿
 みて雪も埋れて畏まり命婦を見るよりハツと手を扣き戰慄く聲の細やか「ナトお願ひ申し」私
 一の過一年仙淨國の善覺大臣の御娘橋鼻彌の方の御附人にて此伽比羅城なる月景殿へ参りたる馬

將軍の娘も侍り遙方の所を只一人尋ねて参りまじられたれば取次をと言さして跡に涙も聲枯て哀と
 も惘然とも喩へん方なき有様と見るより命婦の胸塞がり動りたくい思へとも荷且やらぬ事由あれ
 ば心強も他々しくまづ其仔細を去らせんと浮む涙を吞込て「成程その馬將軍の橋鼻彌の方のお附
 人にてありされと如何ある所存ありけるよや過しこる此方を立去り今でい大悪無道ある提婆達多
 と仕ると聞ば其方罪のなけれとも仇敵の手も附くもの、娘片時ありとも置くとおらさ疾々出て
 行くがよいと枝折戸とと閉切に娘の堪かね伏沈みワツと計り泣入に橋鼻彌の端近く出て命婦も
 仔細を聞き情も惘然の幼女さればそも何程の事のあるべき恐あがら帝へ忍び事の様子を聞たけれ
 ば密に此方へ呼入よと聞て命婦も心嬉しく再び出て折戸を開け見れば娘の箇に如何に雪も埋もれ
 生体も手足も冷て絶々たる息の玉の緒力草命婦の漸やく抱起し肌も添つゝねくめ鳥おとすまの
 下へ連來り一方おぬ介抱し娘の漸々顔をあげ四下見廻し咳きて涙あがらふと両手を扣き橋鼻彌を
 見て打睨れば橋鼻彌も亦娘の顔つくつくと御覽あるよ遠路の旅も寝ても如何にも氣高き袂外れ同
 と浮世に在るがら太子や姫と崇められ又此様も浅ましく居所さへ迷ふ子のあるに如何なる因果
 がや親の心が眞實あらねば生先長き幼稚兒の路頭も迷ふもえらざるか馬將軍の鬼畜と親を憎み

て子を憐
れみ思ひ
を袖を濡

いさまへ

ハ命婦も

共々貫ひ

泣きして

暫く言葉

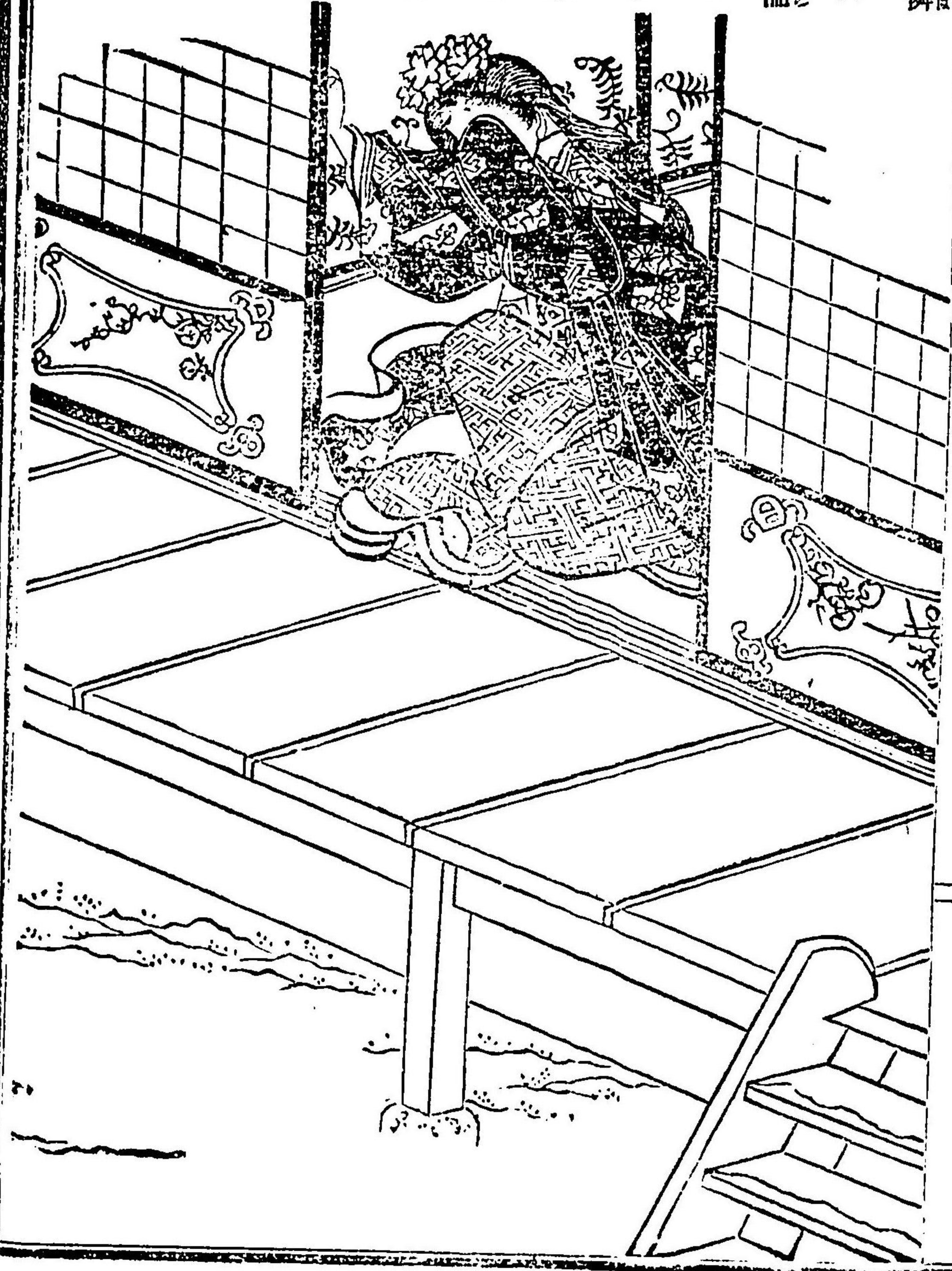
もあかり

一ツ輪

彌の思按

を極め仇

讎の血筋



と知事が

生中憫

然を加へての後の

別れも辛うふんと

詞優く少女も向

ひ「コヤ娘無情も

のと思えうがどう

も此處へはくとあふぬ氣も落付バ支

度して親類の方へ行がよみ而て此品

の僅少ありふサア其許お遣るので

さみ爰へ身妻が捨るゆる拾ふて戻りやと菓子夥多紙お何

か取交て包むお餘る思の程箇の難有しとも云兼る幼稚さ

心は只平伏し涙拭ふて身支度おを視る目悲と彌増て命



婦の橋邊彌又手を扣て「此上ホ一つの願どうぞ此子を」と夜さの此階段の下かりと寐させて遣りたる存トますと云を押止め橋邊彌「如何又命婦親妾も女子ぢやもの此の大雪殊も夜入り何で無情歸されう泊たうてくあふぬ心の山々あれと夫を堪へて情もさく返さぬやあふぬ譚ある娘追やる此身の心の内マア何の様であらうぞと推量しやと言さして涙も暮れば娘の聞分け「エー奥様勿体ない大恩受一爺さまのお主を捨一お憎み夫お引換へ難有いお恵み假令爺様の敵おもあれ私この此の御恩何までも忘却ねばどうぞ爺様の罪科をお宥一おされて下さりませコレ此様も寧を合せ拜みまざる奥様と涙の霰とくく」と落る人の眞誠ある其儘其處お躊躇り父を庇蔭ふ賢一さよ命婦も今の堪りぬ共涙顔を掩ひ「又そんな優一い悲しい憐れ事を言て泣とれり親お似ぬ子の可愛さよ後日如何あるともあれ是が見捨て返されう今宵一ト夜の寒くとも爰お休んで翌早朝起て戻りやと止むれども「イエくモウ参ります跡の御難儀がわいや悲しい皆様お去バく」と止ても止まらせ起上れば雪も小止し薄月夜命婦の是非なく跡も添ひ折戸口まで送り出で「必くお共用心一雪お迂りて轉バぬやう又食物も氣を付て煩らぬやうおまごのよい「アイく難有う存じまそと跡振返りく」廻り行くこと哀れなれ憚て其夜も過ぬれと橋邊彌の馬將軍の娘の行衛を尙

案じ心も更に心ならず命婦を召て痛の氣よ「なんと命婦昨夜の娘の如何おやまつらん雪踏分て今頃の無難義をするであらう「アレ又貴女様の思一出して其様かと御意遊バ一涙とお浮ゆ遊バとかモウ薩張とお思ひ切との申すもの、彼ガマアと跡の涙に口籠れば橋邊彌の眼をまばたき「ソレ其許がモウ泣でいあいう卑妾の悲しくも何ともあい思へバ憎い仇敵の片割と袖を翳せば命婦の又「ソレ貴女もかむづりる「ナニ其許が「イエ貴女がと互に争うふ障子の外お庭掃除の下僕が聲「是又見馴ぬ蕪束の遺留一てと聞よりも命婦の驚き立出て見れり是こ昨日の娘の忘れし品に相違なければと流石お夫との言兼て他お紛う一受取つ、橋邊彌に斯と告げ果敢るい思案も女の習ひ命婦の蕪束携さへてお庭口より浮々と若や其邊に迷ふて居るうと尋ねく「て行く程に彼方より見馴ぬ足輕御注進くど宙を飛で駆來るお命婦の驚き立歸らんとするを呼止め彼足輕優陀夷大臣へ直々お申一上たき一大事あり急い執次下され」と物慌忙しく言を聞き命婦の何りのえらねども先づ此方へと先よ立ちおん庭口へ扣へさせ急ぎ内よ入て斯と告れば優陀夷のやがて走り出で「何事ウハえらねども一大事とわれバ此へ」と招きよ従ひ進み出で「私一とのお家の足輕何某と申するもの過一頃仰を受け姿を變へ身を籠一提婆の方へ問者よ入り太子へ仇する手段の程を見透さ

んどしてけるよ昨夜丑満と思ふ頃邪智倭奸は馬將軍悉達太子のおん首を撃取て來れりどて提婆の館へ提さげ來れり其無念骨髄又激し己れ馬將軍太子の仇敵逃さどももの味方を集め睨ひ居たるよ天命逃れを今朝早くも捕へしゆる直様首を打落し太子の怨を晴さんどの思ひ一が待て暫し尋常あらね悪人あれは伽比羅城へ引歸り太子の御家臣上下を分さず一刀つゝ切斷み俱々天を戴かさる怨を晴し申さんと是へ連來り候ふと述る小優陀夷の不審晴す夢見し心地は詞もあく小首傾け居る所へ白髪まじりの馬將軍又繩を掛て引立し御庭前へ引据りれば優陀夷の様子を亂さんと「コハ珍らや馬將軍淨飯王の御扶持と食ふもの横道もの提婆又組よくも太子のあるときいと内通ひろざしのとさうぞ太子の御首撃取しと披露ありしと問者が注進仔細をあらん夫聞たりサ、語れよと責問ば老年たれど馬將軍聊か怯さし氣色もあく屹と見上て優陀夷に向ひ「最早大望成就の上の馬將軍が本心を只今是よて物語らん暫く縛繩と許されよと云ふ優陀夷の打點頭さ「其繩解けと指揮の下捕手の者の四方を堅め縛繩とけバ馬將軍徐々上りどつくと坐し「如何久しや優陀夷の不慮の面會珍重々々さて某甲の大恩受し此宮中を去し一通物語らん能く聞かれよ我一人の老母あり過し頃この母を提婆方よて奪ひ取り我の味方よ就り付りぬの返答如何よと度々の催促否と

いへバ母の命切斷むと退引させそ好し然るバ此方の又よ末お至りて洪恩を報ざる時節のありもやせん先づ大切ある母の命を助けんものと思按を定め陽面へのりの忠臣顔よて提婆又組しありなるうち提婆もさるもの一つの功ふ悉達太子のおん首と奪取らバ日來の願母の縛め免さん左さくバ命も今夜りぎり如何ふくと無体の難題是非なく館を立出ても空しく歸れば母の命是れを救ふ太子のおん首右も左も恩の山情の海よ漂ふて一歩行きくの一歩戻り一走り一歩戻り一歩行き暫らく道お佇立り思按よ尽て一心よ神佛は名と唱へつゝ腹りき切んとする片傍より十一二ある幼稚兒が雪よ惱みて袖うち振り提婆さまのお館の何處ぞと問ふ顔つくく見てあれバ其の氣高き殊勝らしさは是ぞ正しく親を助け君を助くる天よりは與へと不便をなす扱手も見せせ首打落しそれまゝお館へ歸りて提婆れ前へ携さへて淨飯王れ一子ある悉達太子の首打取たり篤と御實檢下されよと似ても似付ぬその首も忠と孝との二々筋細で提婆の五休と擲めたれば不思議や彼の眼眩み太子のをん首と見定め知る馬將軍出來したり褒美よハ母を返す勝手よ連てとや歸れと聞く間返しと老母を勞り像て願は夕陽山へ姿も比丘お出家させ本望遂し上り有りて甲斐あき老の命捕縛まどとも此方より自首て出て首さし伸べ不義不忠の名を雪ぐんと思ふよ甲斐あき縛繩よりする辨解をあい其證據

の是れ見たまへと言も訖らば差添抜て襟くつろけ左の脇へ突立るを優陀夷の
 支へる閑もかく死あしりと後悔の折ろふ先より物蔭は側聞たまふ頼朝彌命
 姉も共は轉び出で右左は取綴り「ソウ
 惱りし馬將軍最前よりの物語み怨の晴
 てあるものを何故の切腹と泣口説き
 馬將軍苦しき顔を振上げて「箇の勿体あ
 い姫君のお詞たど
 へ朝敵の言譯立つ
 ども過しころかん
 妹摩耶夫人の懐胎
 を調伏せしも我が
 計ひ二人の行者の
 成行を思ひ出すも天恐ろしく大切の太子



を恨みし罪殊よの一旦本心をさすも提婆
 の扶持を食たる上之のふも思の義理立た
 ず只この上のお慈悲よの我が本國へ残し
 かく妻と娘を召寄られかん恵み下ささか
 一是のみ貴泉の碑なりと妻子を思ふ涙の
 雨輪曇霧の堪へるね「如何に將軍を娘
 の顔を見かやわけて居やるかや「去れば
 某甲が娘と申すの未だ懷孕なりたるうち
 此宮中へ参りさればそれ面相のまふねと
 も名をば鹿野女と呼びつゝ年の十二よな
 り侍り何とぞ之を我が代り行末長く使役されお目
 掛られて賜されと割符れ合する昨日の娘偽りもあ
 き眞實は子よて太子様のお身代り必ふす是は極ま



つたり
 と思へ
 の惘然
 彌増て
 命婦の
 涙は暮
 めがら
 「コレ
 其娘御
 の昨日
 爰へ爺御を尋ねて
 来たはいあしと聞く
 より將軍眼を見開

「ヤア我が娘が爰へどうして「サア一人とる」尋ね来て父上は遂せてたべと幼稚は云てい
れど今その父御の悪人の提婆方へ加膽して今此御殿の居たまはず殊は此方と提婆との仇敵同志
の中あれは女子といふても此方への片時も置くことありぬと無情いふて返せしが倍の昨夜途中よて
首打れしのお前の娘と云つゝ、胸押拭へ馬將軍の身を「ヤ、そんなら昨夜首打れたの我娘よく
ありたるか世も因果の斯をかり巡り合せて子の親を戀いと尋ね来る道で親を殺され親の又ま
さいとい子と思ひ爰で死ぬるも他を我か子と頼まん爲をかり然るは斯まで翻語ひ誓ひは誓
ひ一神佛の頼みの綱も断果たれば今いそや是迄あり少しも迅く世と去らんと怨み啣ては輪廻彌優
陀夷命婦も諸共泣き流されて居る處へ遣れられたる蕪束と線も引れて昨日の娘怖々折戸を
来れれば夥子の者誰可て逐出さんとそる聲も命婦の見認め走り出で見れば擬はぬ昨日の娘ゆゑよくこそ
來たれと抱かへへ輪廻彌の前へ連行けば輪廻彌の篤と見て「オ、嬉や〜昨夜首打れたの此子で
のさいさう其許の爺公の彼處ふと聞より娘の傷者も絶り「喃爺様でムんぞかお懐か〜やと
泣沈む血筋の聲も引されて今を限の馬將軍やう〜と顔を上げとつくと見詰てうち駭き「ヤ、其
許の昨夜夜道よて首打た幼稚兒ぢやないか「イエ〜私〜鹿野女でござりませはぬあお前が眞

の爺様さうぞうぞ物言ふて下されといへど不審の晴れやふせ「シテ其許昨日の夜「ハイ昨日此
御殿を戻つてか父上は早う逢たさよ提婆様のお館へやう〜と通り行く道で餘まり夜が更たゆゑ
地藏様のお堂の内で世を明さんと寐たところと言つゝ父の顔打睨り「オ、夫々お前より似似叔
父さんよ首を打る、怖い夢見されども何事もなく夜明て見れば太切の蕪束とり落し是がおければ
爺様も廻り逢ても名乗との出来ぬゆゑ又爰までその蕪束とを取戻つて來ましたと事明細な物語
るを馬將軍のつく〜聞いて「ハテ首と打りも地藏の前娘の寐るの堂の内は是れぞ正しく地藏の佛
力太子と助け母を助け娘と助け我と助くるかん身代かといふを聞き人々一同顔見合せ尊とみ敬
ふ佛の誓ひ今の世までも明けく身代の尊体とて伽比羅城と伊婆那國とその間の道傍も立せたまふ
ず難有き傷者の娘を引寄て「鹿野女であつたか懐かや母の何處も居るとか其許一人來れせまい何
處よ〜と尋ねられ娘の何と應答さへ泣く眼をやら〜と搔拂ひ「あの母さん此内よと命婦が渡
せ〜蕪束を差出したる不思議の詞よ「ナニ母が此内よと押明見れば錦の袋中より位牌を取出一
そんなら母の亡あつてか「さいゝあゝ母子二人の託住居も朝夕の事も乏しく夫も祖母様が提婆の方
へ捕れさん〜と聞よりも母さまの病起りか薬餌とても隨意ならせ日よま〜重る枕の傍私〜へ御

遺言も若しも此身が亡ならば守袋も納めれく其許の臍の緒并は又系圖の書物一ツよして大切又肌
も添へ伽比羅城の父上を尋ねて親子の名乗をせよ必す母のない跡で悪あがきして父母の名を汚
そなど御教訓そのお詞の内よりいよ弱りて程もなく果敢なくならせたまひよき呼と叫べど
とや届かず是非もなく豫てより仰わりたる院へ葬り夫より此なるお位牌と系圖の書物大切よ
尋ねて来れば父上も敢なき最斯の此お姿どうぞ卑妾も諸共小冥土へ行つて母様小逢さいといのと
取絶ふれ馬將軍の現又道理とても因果の切迫ごと一人ばかりの残さぬと腹は立たる身よて既又斯
よと見えけるを橋邊彌の走り寄り鹿野女を迅く抱き取り「血迷ふか馬將軍佛の助一尊き娘今よ
り卑妾が貰ひ受け追て太子の後よ侍け馬將軍の家名をば萬代までも絶たまじと聞て將軍臨終の喜
悦「ハ、難有や辱けちや此上ハこの世の中お思ひ遣とと更おあ一其お詞の將軍よハ名僧智識のハ
ん經より實は難有き御引導方々去らば南無阿彌陀佛と右へ引たる彌陀の利劍は此世の苦痛ハ逃れ
たる鹿野女の取付き聲を擧げ歎けと返らぬ無常の風優陀夷も俱ハ咽つ、忠心義心孝心を感ずる涙
果一ち一恚て橋邊彌の優陀夷お命トて其亡骸を厚くとりおのせ忌日くも懇切ハ弔らひ鹿野女の
愛一みも漸次ハ深く養ひたまふぞ辱けちもかゝる有様を太子ハ聞一召れ一よりいよく發心

の志ざ一深く摩耶夫人の亡跡二つよハ彼等が菩提も捨るよ忍びずと幼稚き身とて露の命ハ草は宿
り一露の如く無常の風の誘ひちハ後とも更ハ言難しあハ味氣あハ我身かちと流るハ氷に臨みてハ
その行末を思ひやり天飛ぶ鳥を御覽じてハ其行先を羨みつ、今夜の中よも宮中を忍び出んと思へ
ども行く先更ハ辨知へねハ辿り迷えん覺束さ我ハ發心の師ハ何處如何ある地ハ在とる誘ひたま
へと苦餘々々惱み泣たまふも人目憚る忍び兼ハ次第くハお姿も窺れて遂ハ朝夕の供御も進
ませたまえぬを侍者より橋邊彌へ報知申せば打驚き直ちハ太子の居間へ行き様子伺ハ橋邊彌「
この程ハかん惱み強く在く朝夕の供御も進ませたまえぬよし卑妾が心細さハ何ハ比へんやう
もあ一も一過つる頃卑妾が太子を無情ハ怨み申一そのおん心の晴やらで夫故のお惱ま一ます
とも在さんかど心苦く侍るか一と詞優一く日へハ太子ハ深き御思按われハ「是ハ又ハ母君の思
もよらぬおん詞如何あるとのあればとて母上のお詞何一ハ惱とあり申さん「去ハ人ハ人を友と一
て語り慰むもれと聞ハ夥多ハ公達を召寄て舞ハ御會を催はされおん心と晴させたまへと聞て太子
ハ笑を含み「夫こそ應の望む所去らば夥多ハ公達へ其沙汰致さん誰かある優陀夷を是へ疾く召べ
と御意の趣さお次の女中急ぎ優陀夷へ告おける去る程ハ諸卿の公達ハ太子此度舞の御會を催一た

まふどの召依て地謠笛鼓
 太鼓みな夫々又役を設け我
 劣くじと花美お綺羅を飾り
 威儀を作ろひ参内ゆるこそ
 美々々れ既よその刻限至
 れバ舞臺の正面より淨飯王
 太子を始め奉つり月卿雲客
 左右より列なり舞の曲鳴物の
 妙音と見聞せらる此の有様
 の賑一さ中々詞おもも尽され
 ず去ども太子の兎お角に此舞樂もも心
 移らす其終るを待ちたまふうち早や番
 組の數積り太子の父君へお暇を乞ひ月



景殿のお居
 間へと返ら
 せ玉ひし其

後よ今日参内の公達を殘さず
 是へ召集むべーとの仰を蒙り
 光明大臣其趣きを通達すれば
 皆々太子のかん居間へ引續き
 並出れを太子の今日の舞樂の
 役々を殊の外御賞美ありて皆
 曰ふやう「磨が思ふの外なら
 だ十人寄り十里の物語十品を
 知るといふよ依り幸ひ今日の
 公達のよき参會の折あると思
 ひくの物語心のまゝお打明
 て一坐の興を催されよ磨が喜
 悦此上ありと聞て諸卿の公達



太子の心お忍
 むる深き仔細
 のあるとも知ら
 ぬを面々進み
 出で浮世の風評
 とりく物語
 ろと雖も太子
 の心よ配當る言
 葉の端もあさま
 しく太子の只如
 何よもして我が
 心ざと道の邊を
 尋ね落して知ら

ばやと色々御工夫ありしが稍あつて心は點頭さ「如何も皆々聞たまへ凡そ四海のうちに住む生
 とし活る者毎々心々を伴を求め馴親みて遊ぶやらん此義如何かと曰へば上坐も扣へし公達が進み
 出て申とやう「さん候ふ夫は付き種々變るとのありまづ其仔細を一通り申し上ん夫龍の昆蟲に
 して諸蟲を併べを獅子麒麟の諸畜より諸畜は脚蹤と交へず然れども彼等の皆心なきもの
 なれば伴と以て己が心を願ふもの候へば片時も伴を離るゝとあつた又た人間の格別にて上品
 下品あるがゆゑも我心と以て友とあへば心の如き友を心うら親み候ふがゆゑ己が心と知ら
 んと思ひ先づ己が親む友を見つべしと申とこの候ふと速りに言上りなれば遙か末座も扣へる
 年若なる殿上人前ある人と日未より何うも付て中悪く芽々々物言ひたるが此時まゝ進み出て、
 「只今某甲が言上致せし心の沙汰の左もあらず畜類の左もありなん夫あふざれり知ると難一人
 間の事の却々左様ある譯なはず假令心は叶ふ友を伴と一しく思ふとも心は叶ふ友あるべからず左
 れば友あきとて心と友とて只獨り慰むものあらん無事と有が如く能く沙汰したまふ人かると上
 坐と睨て苦々々々駁撃なせば以前の人堪へ兼つ、膝押進め「アラ出過たる青口啄うな貴殿の如く
 心なきものよ於て力及び某甲只今言上せしと道ある人の譬あり入ざる過言嗜みめされと詞と

正して言返さる尙も怯まぬ末坐の敵手扇子を笏ふ威大高「イヤ、夫と由なき事假令理は當ると
 いふとも證據あきとの數なはず又證據あると云とも躰なきとの明白あらずサア何處如何なる處に
 か心を友とて只獨り住たる人の候ふやと疊毆いて詰寄を以前の人も又屈せず「夫れ人間たるも
 のに皆聞く事を語るものなり某甲も又た聞さる事を物語り申すべし世間は道の絶えといふ文武二
 道の言も更なり音楽の道管絃絲竹管業琴書畫骨董何れか秘事のなかるべき去ども是等の品々の
 善も悪くも夫迄なり情愛も道と云るの心を友とするとなり夫を賢道明道聖道とて三つの道あり賢
 道と仙法の秘事あて發心放捨の道と聞く情明道と明朱元現捨消悔の秘事と聞く情聖道と申す
 の恐堪撫育の道より十善の解毒も君への諫め政事國土安善の秘事といふ此の三道を學ひ得て心
 を友と得る人を大道人と世に稱けて尊き人との申すなり已に此國の天門あ一千三百餘里と隔て
 擅特山と云るあり此處の稀代の寶嶺ありて雪泉硫黃摩靈泉青龍青陀羅幾陀金剛靈諸々の御法の峯
 小則ち心を友とて行ひ澄す賢道無二の神仙達歴々として分明なりと豫て承まとり候らふと詞清
 しく述べれば太子の感涙胸も充て日來より心も酒ぶり是なるものと思へ思へ思へのみ面も其色を顯
 とささ荒爾として曰ひける「アラ尊どの物語うな何れもの詞思ひなく皆面白くくと残る方な

く愛たまへど彼の年若なる殿上人の前後の事も辨知せ人の話の腰を折て手持無沙汰も見えよなる
其時太子の御心お思ふ仔細の在りませば上座の一人を留めかき其餘の公達一同へ残らず暇賜
ひしかば願て退出したりたる憚て太子の残りたる彼の一人の殿上人と御膝近へ進ませ給ひ「如何
も只今の心なき若年の分として仍なき詞を吐き殊々尊き物語の障碍をなすつるが必らず心懸ら
るゝな魔の心も合はれ何とぞ今の物語の跡詳細に聞まわ疾く聞せてよと改たまり仰お彼人
打駭き「是の又若宮様の思もよらぬわん詞只今の物語の仰お任して取敢ず當坐の興お申せし又尙
わかん尋問も預りての恐れ入り奉まつると卑下して云ぞ聞入たまさず「イヤ／＼尋常ならぬ今の
話委しく聞ん爲めふこそ夥多の者を先へ返せり是非とも聞ん率々と引引れぬ詞の續き形を改た
め咳きまつ、「然らば御免と蒙りて拙きながら申上上諸亦鬼門も相當つて千二百五十里と隔ち
阿育仙、阿是陀仙、奇羅々亞叔、無明賢堂、志羅摩迦、真發羅仙、是皆な妙手の験者達よくも行ひ澄
て住たまふと聞く此等の事理も証も跡も存るとながら只傳聞のまゝなるをかん慰み申をなりか
笑草と思しめ詞遣の身きをば御免しあつて此まゝお早や御暇たまされうと申を太子引止
め是ぞ天より人を以て云めたまふ教よらう尙奥深く聞ばやと「アラ尊き物語天門どの辰巳の事

鬼門どの丑寅の事シテ一千三百餘里を行歩する道の末も猶人の住家もあるや「さん候ふ五百
里の鹿野道と申して民の庵も之あるよし儲うの先五百里の人の往復のほりながら寂寞として谷深
くまた其先三百里の山陽道と申して山の峯を超ると承はり候ふと聞て太子の肚の裏お飛立つ
り喜びたまひ如何も天お口なくして人の謠ふを法となし人お心なくして天の心と心とを
今も思ひ當りたれと思ふ心を色お出さず彼殿上人を勞ひつゝ先づ今日の是迄なりと御暇を
賜ひける畢竟悉達太子檀特山の道程を聞得て發心の目的を遂るや否次編も説を讀て知ね

釋迦八相倭文庫三編下之卷終

明治十六年八月十日出版御届
明治十六年十月 出版

一册定價金十五錢 郵稅四錢
十册前金一圓廿錢

全	出版所	全	取	發	次	兌
全	京橋區灘山町五番地	全	神田區神田雉子町	全	羣馬縣前橋本町	全
全	四番地	全	京橋區南鍛冶町	全	各府縣	全
全	斯文堂	全	報告社支店	全	倉田太一郎	全
全	報告社	全	巖々堂	全	書肆	全

○斯文堂發兌書目

- 一校訂繪本貞田三代實記 全三十册每月二回又八三回出版
- 一册定價十五錢郵稅四錢
- 一眞書釋迦八相倭文庫 全凡三十册每月二回又八三回出版
- 一松染秋 七 艸 全四册每月二回出版
- 一册正價十錢郵稅四錢四册前金卅五錢
- 繪本太閤記 ○繪本曾我物語
- 繪本甲越軍記 ○開卷驚奇俠客傳

報告社同盟出版ノ部

- 俊寛島物語 ○朝夷奈巡島記
- 近世美少年錄 ○皿々郷談
- 常夏双紙 ○美農古衣八丈奇談
- 繪本漢楚軍談 ○繪本通俗三國志
- 以上近刻
- 甲部同盟出版書目
- 一資治通鑑 全六十册 定價廿五圓 郵稅廿圓 十二回出版 七回既刷

- 一漢書評林全凡廿八冊 定價十圓 十四回出版 預約七圓五十錢 五回既刷
- 一佩文韻府 全百六冊 定價八圓 廿一回出版 預約四十五圓 二回既刷
- 一史記評林 全廿五冊 定價十圓 六回出版 預約上七圓並六圓五十錢 二回既刷
- 一十子全書全三十二冊 定價十二圓 七回出版 預約七圓八十錢 近刻

○本部同盟出版書目

- 一沿革官令類聚目錄 全二冊 定價四圓二回出版 預約三圓八十錢近刻
- 一佛國法理論 全一冊 定價一圓郵稅二十錢 預約並五十五錢上七十錢
- 一全刑法詳說 全一冊 定價一圓廿五錢 郵稅卅二錢 預約並八十錢上一圓
- 一全民法解釋 全一冊 定價二圓 郵稅五十八錢 預約並一圓廿錢上一圓五十錢
- 一全訴訟法原論全一冊 定價二圓五十錢 郵稅全 預約並一圓八十錢
- 一全政典 全一冊 定價一圓 預約並五十五錢 上七十錢
- 一社會學全書 全五十冊 一冊定價三十錢 每月二回 又八三回出版 預約一冊二十錢 郵稅四錢
- 一名經世原理

- 一政理汎論 全十二冊 一冊定價二十錢 每月二回 又八三回出版 預約一冊十五錢 郵稅四錢

○乙部同盟出版書目 印刷着手ノ部

- 一本朝文粹 正全七冊 定價三圓 預約二圓 二回出版 續全四冊 定價三圓 預約二圓 一回出版
- 一太平記 全十冊 定價三圓 三回出版 預約三圓 一回既刷
- 一源平盛衰記 全十五冊 定價三圓五十錢 四回出版 預約二圓三十錢 一回既刷

○同盟出版見本并方法書御入用ノ向ハ二錢ノ郵便稅御送附次第呈送スヘシ

大坂府平民
重訂人 渡邊義方
芝區日蔭町一丁目一番地
東京府平民
出版人 大野吉之助
京橋區瀧山町四番地